

学生座談会
京都に巣づく —「そこに住まうこと」を考える—



鴨川デルタ (写真提供: 新 靖雄)

SAPPORO ▶
奥村拓哉

TOKYO ▶
三宅真由佳

OSAKA ▶ TOYAMA ▶ TOKYO ▶ OKAYAMA ▶ KYOTO ▶ SWITZERLAND ▶
中村友彦

OSAKA ▶
齊藤風結

OKAYAMA ▶ OSAKA ▶ HIROSHIMA ▶
尾上潤

KYOTO ▶ TOTTORI ▶ KYOTO ▶ TOKYO
尾崎聡一郎

FUKUOKA ▶
長澤寛



京都大学には全国あるいは世界各地から学生が集まっています。そのため学生たちが京都に巣づいていく過程は一樣ではなく、それぞれが京都という街への思いを抱いているでしょう。

京都において観光客でもなく完全な住人でもない、学生という立場で、「そこに住まうこと」を考えていきます。

聞き手: 雨宮美夏、高山夏奈、竹岡里玲英、久永和咲
2020.8.2 オンライン開催

——今日は学部4回生から修士2回生まで、各地方を代表して学生8名をお招きしました。はじめに自己紹介をお願いします。

奥村——修士一年の奥村です。出身は札幌市で、生まれてすぐ東京に引っ越して2年過ごした後、親の仕事の関係で、アメリカのヒューストンに。3、4年ほど過ごしてから札幌に戻ってきて大学から京都で一人暮らしを始めました。

三宅——四回生の三宅真由佳です。生まれは神奈川県で、幼少期は神戸市と横浜市で過ごしました。その後、引っ越して東京都渋谷区に10年、練馬区に3年いました。今、実家は世田谷区にあります。

齊藤——修士一年の齊藤です。生まれは大阪なんですが、幼稚園の時は兵庫県三田市、小中高の時は大阪の堺市に住んでいました。大学に入ってから京都で一人暮らしをしています。

中村——修士二年の中村友彦です。生まれは大阪の枚方市で、富山市、東京都文京区、岡山市を経て、大学生から京都で一人暮らしを始めました。修士一年のときにスイスで1年留学した後、現在また大阪の実家で暮らしています。

尾崎——東京大学修士一年の尾崎聡一郎です。生まれは京都で、父の実家がある鳥取県に小3から移って、大学でまた京都に戻り、大学院から東京に来ました。

尾上——四回生の尾上です。僕の出身は岡山県で、高校卒業まで過ごしたあと、大阪で1年浪人生活をして、広島大学に入学して、東広島市で1年過ごしたあと京大に入り、今は下宿しています。

長澤——修士二年の長澤です。僕は生まれは福岡県の筑紫野市というところで、実家がある福岡県糟屋郡須恵町というところで高校卒業まで過ごしたのち、京都で6年を過ごしています。

京都というまちについて

——京都に来て衝撃を受けたことや初めて気づいた地元の特徴はありましたか。

三宅——東京って交通網は電車や地下鉄がメインで、私の高校には「自転車に乗ったことがない」「乗れない」なんて子が結構いたんです。でも京都だと大学にも自転車通学。むしろ自転車大国みたいな感じで、衝撃を受けました。

奥村——たしかに交通網には違いがありますね。札幌は地下鉄がメインなので。京都に来る前は札幌は田舎だと思っていたので、田舎の札幌に地下鉄があるならどこにでも地下鉄があるだろうと思っていました。

中村——岡山と京都は自転車でどこでも行けるという点ではちょっと似ている気がしました。市街地はすぐフラットなので。だから、自転車文化にはすぐ馴染めました。

尾崎——鳥取は商店街や郊外のほうが栄えているので、皆自転車ではなく車で移動しています。電車も1時間に1本とかが普通でほぼ使い物にならなくて。ちなみに鳥取では未だに「汽車」っていうんです。電車通学・電車通勤のことを「汽車通」っていう。



JR 西日本因美線を走るディーゼル列車（撮影：尾崎 聡一郎）

齊藤——京都では路駐がとて多くて、追い越し車線がメインになっているから車は使いづらい印象があります。やっぱり道路自体が狭いからですかね。

中村——京都は自動車が発達する以前の街のつくりが強すぎて、それが残っている。普通の地方都市は新しく車のために開発しているよね。京都の道は全部直交で、どう進んでも辿り着くから歩くたびに発見があるのが魅力だと思います。

尾上——暮盤の目だから京都は地図がなくても歩けますね。

尾崎——東京の人は東京の地図って頭に入っているんですかね。電車の路線は分かるけど、京都みたいに頭に地図が入っていないんです。

三宅——たしかに京都ほど東西南北の感覚がないですね。私も線路としては大体の位置は覚えているんですけど、それがどの方向に向かっているかとなると疎いです。

齊藤——東京は駅ごとのまちの特徴が多様な印象があります。

三宅——東京は繁華街ごとに服装すら全然違うんです。私も、友達と自由が丘や代官山のお洒落スポットに行くときは「大人っぽい人が多いから背伸びした格好でいこう」とか。それに対して京都はまち全体が似たような、ちょっと平坦な感じはすると感じています。

齊藤——京都の街並みはすごく水平に広がっていますよね。例えば大阪の梅田は高層ビルとショッピングのビルが垂直方向に並んでいて、その中で上方向や下方向に行きますが、京都は水平方向に商店街が広がっていくので、最初に行った時はびっくりしましたね。

奥村——札幌は全部地下で完結できてしまうから移動も全部地下です。地下街に店も入っているのほとんど外に出ない。その分、方角も意識することがないのかなと思います。

進学にあたって京都を選んだ動機

齊藤——京都大学に行きたかったのは大きかったですけど、単純に京都に住みたかったのはあります。家族が来ることを考えたときも、自分が京都のサテライト拠点になったら旅行のときに便利だなとは考えていました。実際、家族はコンスタントに来ています。

奥村——僕はそもそも大学を東大と京大で迷っていて、将来的には東京に住みたいから大学生活は一旦京都に住もうかなという考えが決め手の一つでした。

長澤——北海道という1個完結してる島の生活圏の中から出たいというモチベーションってなかったですか？

奥村——僕は、一人暮らしがしたかったので出たいなと思っていました。けど、外に出てみて初めて地元の大きさや魅力の多さに気がきました。

——実際に学生になって、京都に住んでいることを実感した瞬間は何かありますか。

三宅——河原などの屋外で飲んだり、花火したりするときです。私が高校生のときに京大に入った兄から、友達と鴨川の河原で花火した話を聞いて、京大に入ったらそういう遊びができるのかと魅力に感じていました。東京にはそうした自然がないので、それが京大を選んだ決め手になりました。



鴨川での花火（撮影：三宅 真由佳）

齊藤——喫茶店で観光客らしき人が入ってきて、「〇〇寺きれいだったね」みたいな話をしてるのを見て、「ふふ、楽しそうだね」って、京都側の人間かのようなコメントが浮かんでしまったときに、ちょっと馴染んだのかなっていう実感はあったかもしれないですね。

尾上——僕は、部活で下京や西京極に自転車で行くんですけど、その帰りに「あれ、これコナン君の映画で見たぞ」と気付いたことがあって、スクリーンであった京都が目の前にあるんだと思いました(笑)。あとは単純に関西弁を聞いたときにも、京都を感じました。

京都でよく訪れる場所

——京都で好きな場所などはありますか。

尾崎——木屋町のクラブハウスみたいなところが好きでよく行ってます。地元だと世間が狭すぎて、そういうところに行ってもいる人はほぼ全員知り合いだけど、京都は新しい人も知っている人もいてその塩梅が良かった。地元の人にとっては言わばサードプレイスのな場所で、めっちゃ好きでした(笑)。

——観光名所は今でも行きますか。

尾上——地元から友達が泊まりに来ていた二回生くらいまではよく行っていましたが、三回生になると設計演習や部活で急に時間がなくなって行かなくなりました。

奥村——僕もただ単に時間がなくなって行かなくなったということもあるし、部活休みなどのまとまった時間ができたら他の地域に行ってみたくなったということもあります。

長澤——逆に僕は今まではあまり外出しなかったんですが、京都での生活が残り半年になった今は、京都のまだ行ってないところにせかさされるようになって向かっています(笑)。

中村——僕は部活もやってないし時間があるから今でもいろいろ場所に行っています。特に、留学から帰ってきて京都の風景がすごく新鮮に思えます(笑)。いわゆる観光名所は、友達が遊びに来たときに一緒に行くことが多く、そこまで人は来ないけど綺麗なお寺などを一人で開拓しています。



詩仙堂 (撮影：中村 友彦)

奥村——桜とか紅葉の季節になると一気にいきたい場所が増えるというイメージですね。

中村——それをきっかけに行ったりするよね。

齊藤——僕は寺院より、コンスタントに行ってるのは美術館ですかね。先日開館した京都市京セラ美術館のような大きいものや、一方で街中の少し怪しそうなギャラリーなど、美術館の数や種類の多さも京都の特徴の一つなのかなと思います。

三宅——私は、中学校の修学旅行で強制的に京都の観光地に行かされたのが結構、トラウマになっていて……(笑)。

一同——(笑)

三宅——だから、大学で京都に来てから自発的に行こうと思えなかったんです。でも最近コロナであまり遠出できなくなったので、気分転換に一人で鴨川沿いを歩いたり、ちょっと足を伸ばして銀閣や南禅寺水楼閣に行ったりすると面白いと感じています。



琵琶湖疏水の桜（写真提供：新 靖雄）

故郷を離れて暮らすこと

——病院や美容院など、日常的に使うところで、京都に行きつけの場所はできましたか。

齊藤——僕は髪を切るのも、病院も大体、余程緊急じゃないかぎり実家ですね。そういった場所に行くことを、地元に戻るきっかけの一つにしているかもしれません。

奥村——僕は実家にすぐ帰れるような距離ではないので、引越しと同時くらいに行きつけが切り替わりました。

尾上——岡山は近くもあり遠くもあるので少しずつ移行していきました。二回生に上がるくらいには、90%くらいは京都で済ませるようになりましたね。先ほど言われたお二人の中間くらいの位置付けかなと思います。

齊藤——中村さんは留学先のスイスで美容院に行っていたんですか。

中村——スイスで1回髪を切ったら、不自然に短くなったから、そのあとは自分で頑張って切っていました。

齊藤——そうなんですね（笑）。

中村——あっちでは基本刈り上げるからね。昔の自分の髪の毛の写真を見せて切ってもらったけど、それに近づけようとして、結局ほとんど坊主に近くなった（笑）。

——髪を切るタイミングで実家に帰るというお話がありましたが、実家が遠い方は、帰省する頻度や滞在期間はどれくらいですか。

長澤——お盆とお正月の大体年に2回で、滞在期間はそれぞれ1週間くらいですね。田舎の方なので親戚の寄り合いがあって、実家に帰る前に親戚何家族分かのお土産をしっかりと買って、その集まりに顔を出すみたいなことをやってきました。かなり、典型的な田舎の生活だと思います。

三宅——私は結構、帰省するタイプで、東京は新幹線でも2時間くらいなので一回生の時は月1で帰っていました。

奥村——僕は移動で半日以上潰れるので1週間くらい休みが取れるときじゃないと帰らないし、部活もしていたので、年に2回帰れたらいいかなというくらい。

尾上——僕も部活をしていたので、帰省するのは1年に2、3回。簡単に帰れるんですけど、部活と設計が忙しくて、あまり一回生のころから帰っていなかったですね。

——京都と実家に対して「帰る」という言葉の使い分けを意識することはありますか。

中村——「実家に帰る」と「京都に戻る」という感じが個人的にははっきりきます。京都は思い入れのある場所だけど、あくまで人生の中の学生時代の時に過ごす仮初の場所という認識がどこか自分にあって、だから戻るという表現がはっきりくると思いました。

奥村——実家に帰る、京都に戻る。その使い分けを最初はしていて、でも明確な区別はだんだんなくなってきている気がします。

齊藤——実家には帰ると言っているような気がしますね。いつか実家で「じゃあ明日京都帰るわ」って言ったときに「いや、帰るのはこっちやろ」と理不尽に家族に怒られたことがあって、それ以降言葉遣いは気にしています（笑）。どちらかという中村さんと一緒に「実家に帰る、京都に戻る」。京都は仮暮らし的なイメージですかね。やっぱり、

頻度に影響しているのかもしれないけど、あくまで拠点は実家というイメージです。

長澤——僕は拠点を移すというよりは拠点が増える感覚の方が近いです。将来、他のところに住むとしても実家も拠点としていますし、住むところをどんどん増やしていくという感覚なのかなと思いました。

学生として京都に「巣づく」とは

——京都に移り住む前後で京都に対する評価が変わりましたか。また、将来は京都に住みたいと思いますか。

中村——僕は、将来は別の場所で働く気がしています。学生時代の限られた中ではかない魅力は感じているけど、将来京都に住んでいる姿はあまり想像できない。今も住みこなしていると言っているのかもわからなくて。京都は人生の一時の、大切な場所だなと思いました。

齊藤——その感覚はわかりますね。個人的には地元よりもすごく住みやすいけど、将来、京都で仕事をしているのかとか、実際定住しているのかというイメージが意外とつかないというのはありますね。

中村——そうだね、定住する場所というよりも、お店とかも、特に大学のまわりは学生が入れ替わることを前提でやっていたりするじゃない。だから、根付くというよりも、渡り鳥が巣をつくってまた出て行くみたいな感覚をもっている人が多いかもしれない。



祇園祭 (写真提供: 新 靖雄)

奥村——東京は、働く場所として定住することが想像できるんですけど、京都は歴史ある場所とか観光名所というイメージがあるから、定住するというのが、想像できないのかなと思いました。

中村——うん。京都という場所が強く「住まわせてもらっています」みたいな気持ちになる。

奥村——わかります。

尾上——僕の描く将来像と京都で働くことが一致しないので、最終的に他の都市に出ることになるのかなと思っています。けど、建築を生業にして働けるなら、僕は京都に住み続けることも想像できます。

齊藤——京都は新陳代謝が激しい街という印象で、行き来する分にはいいけど、僕には定住するイメージはあんまりなくて。これからもしコロナが、地方都市が活性化するきっかけになるとすれば拠点意識みたいなものは重要になってきそうですね。

尾上——僕は田舎の地域のコミュニティを感じながら成長してきましたが、アフターコロナで場所に意味がなくなっていくと考えたとき、地域のつながりがないと、災害時に脆いんじゃないかと危惧しています。

中村——田舎に昔住んでいたことがある人は、またそこで住むのはイメージしやすいと思うけど、例えば東京出身の三宅さんが老後は岡山で暮らそうとはならない気がします。昔からあるコミュニティに飛び込むのはすごく勇気があることだから。東京とか大阪とか、大きい街の役割って、いろいろな人を受け入れる余地があるところなのかなと最近思っ。そう見たときに京都って大きい街とも田舎とも括れない、難しい立ち位置かなって。

三宅——東京に駅ごとの広がりがあるのに比べれば、確かに京都は大きい街ではないですね。

尾崎——東京は京都よりさらに新陳代謝が激しいからかな。田舎の狭さに比べたら、京都も全然広い方で、僕はいい塩梅だと思うけど。

——京都の学生の新陳代謝は、伸びては切って入れ替わる、爪の先みたいなのところがありますよね。一方で、三代以上住んでいないと京都人とはなかなか言えない。

齊藤——そうやってベースがしっかりしているからこそ、新陳代謝が目立っていると思う。大阪は常に動き回っているから、その新陳代謝的なところを感じないっていうか。なおかつ僕らは、爪の先で遊んでいることしかできないから(笑)、深く京都で過ごしているイメージが湧いていないのかもしれない。

中村——確かに京都の底知れなさみたいなのを感じているから、「お邪魔しました」って言って出ていく感じがあるような気がします。

——何がきっかけで住みこなしてると思えるようになるのでしょうか。

三宅——目的地の選択肢が増えることは、住み慣れたと感じる点の一つで。例えば観光地で人気(ひとけ)のないところに行きたいと思っても、人が集まるようなところしか調べられない。でも住んでいると、意外な場所とか、ちょっと気持ちよさそうな場所とか、いろいろな場所を発見して、選択肢が増えてくる。それは住みこなしたに近いのかなと思います。

齊藤——さっきの手と爪の先みたいな話があるとなれば、手の方にある強靱なコミュニティの一端に触れることができたときに、自信や住みこなしている感覚が生まれるん

じゃないかと思っていて。例えばバイト先の設計事務所の所長は大阪出身なんですが、彼には京都を住みこなしているという自負がある気がする。京都で何十年と仕事をして、いろいろなコミュニティに自分が属していく中で芽生えた感覚なんじゃないかと思います。

尾崎は結構ディープな場所を知っていて、そういう意味では一番京都を住みこなしていたのかなと思うけど。

尾崎——自分では住みこなしているって一生言えない気がします。木屋町のクラブは京都人でない人がほとんどだから本当の京都の人たちは木屋町には行かないイメージがあるし、祇園のお茶屋さんでバイトしていた時に知り合ったお客さんとは話していて差別意識のようなものを感じました。周りが百年くらいの単位で暮らしている人たちのコミュニティに属しても、逆に住みこなしていると思えなさそう。

中村——ここでは、僕たちが京都で学生として住みこなしているかという話になるのかな。

僕はさすがに学生としては住みこなしている気がします。京都の良さを分かってきたような気がする。でもたぶん一回生のときは分かっていなかった。

奥村——僕も、学生としての住みこなしはもう出来ていると思っています。とはいえ、そもそも最初から住みこなそうとはしてなかったと思います。地元のことは何でも説明できるようになりたいと思うけど、京都はある程度知らない場所も残しながら住んでいかないと、魅力が半減しちゃうかなって。

長澤——僕自身はインドア派なのでまだまだ学生としても住みこなせたとはい切れませんが、異なる住経験を経た皆さんの学生生活を重ね合わせる中でそのどれとも違う京都の深遠さのようなものを垣間見た感覚です。現役学生だけでなく、例えば先生方の学生生活なんかも聞いてみたくなりました。

今日の座談会は、学生という立場から京都に「住まわせていただく」という何年間かの価値を共有できた気がしました。



オンラインで開催した座談会の様子

